〈書評〉

マイケル・ウォルツァー著，駒村圭吾・鈴木正彦・松元雅和訳
『戦争を論ずる―正戦のモラル・リアリティ』

崔　　吉　城
大学院　総合学術研究科　人間科学専攻
dgpyc081@yahoo.co.jp

2008年の夏，私は「戦争と戦没者をめぐる死生学」，21世紀COEワークショップに参加し，司会をする機会を得た。その時，私は，自分がこれまで戦争に対して矛盾した態度を取っていたことに気づいた。[1]その矛盾とは，自分の中で，戦争肯定論と反戦論が混在しているということである。幼少時に朝鮮戦争の戦場を目の当たりにした私は，以前，当時の体験に基づいて小論を書いたことがある[2]。その論調は，戦争の否定によって平和を求めるというナイーブなものであったが，基本的な立場は，現在も変わっていない。戦争の悲惨さをもって戦争を論じるという意味では，私は反戦的な部類に入るのだろう。ただ，私の反戦は，筋金入りの社会運動家たちの反戦運動や平和運動とは違う。戦争を正と見るか，不正と見るか。あるいは戦争のモラルの問題をどう考えるか。マイケル・ウォルツァー（Michael Walzer）の『戦争を論ずる』を紹介しながら，戦争の諸問題を論じてみたい。

まず，戦争観や戦争のモラルを論じた著名人の論評をみておきたい。ノーム・チョムスキーといえば，生成文法の提唱者として著名な言語学者であるが，「軍事戦略家や政治家だけに戦争論を任せるのは危険である」と警告を鳴らしている。（ちなみに，私の戦争への関心も，基本的には彼と同じである。）チョムスキーは，外国への救援的軍事介入（rescue mission）については，道徳的ジレンマを感じながらも，反戦の立場を堅持している。ただし，彼は戦争の正義については，積極的には言及していない[3]。

『第三の波』の著者のＡ・トフラーは，戦争と反戦の両面から考察している[4]。トフラーは，人間が生活や家族のため，あるいは疾病に対して戦わなければならないことを含めて，「戦い」は人間社会の普遍的な現象と捉える。そして，民族間の経済的競争，デマや狂信，民族国家の主権の侵害などが原因でさまざま武力紛争が起きるだろうが，これらに対する新しい態度として，私たちが戦争をするか，反戦平和を守るかを考える必要があるという。また，これからの戦争は，ロボットや無人戦闘機，高性能軍事衛星，音のシステムなどのハイテク兵器によって，実際に人間を殺傷することなく敵を無力化する知的戦略が支配的になるという。ただ，トフラーも，戦争のモラルを直接的に考察してはいない。

戦争を正と見るか，不正と見るか。戦争の正義

[1] 2008年６月６日に東京大学で行われた「戦争と戦没者をめぐる死生学：21世紀COEワークショップ」（座長：東京大学大学院人文社会系研究科基礎文化研究専攻島薗進教授）の４つのセクション（第１「戦没者への目差し」，第２「戦争と死の物語り」，第３「戦争をめぐる論争とその超克」，第４「戦争の論理」）のうち，第１，２のセッションの司会を，私が担当した。日本をはじめ，韓国，中国，モンゴルからも報告があった。東京大学大学院人文社会学系研究科・グローバルCOE「死生学の展開と組織化」，シンポジウム報告論集・「戦争と戦没者をめぐる死生学」，東京大学大学院人文社会学系研究科，2010，９，30

[2] 「朝鮮戦争と韓国社会の変化」『変貌する韓国社会』（第一書房，1998年）；「韓国における性と政治」『恋愛と性愛』（早稲田大学出版部，2002年）

[3] Noam Chomsky, At War with Asia, Fontana, 1971：12-13. October 24, 2001 *The New War Against Terror* By Noam Chomsky,［Transcribed from audio recorded during Chomsky's talk at The Technology & Culture Forum at MIT］

[4] Alvin and Heidi Toffler, *WAR and ANTI-WAR. Survival at the Dawn of the 21st Century*, Little, Brown and Company, 1993：19, 24

とは何か。戦争観は，戦争の本質を考える上で避けて通れない問題である。ウォルツァーの『戦争を論ずる』は，この問題を正面から論じており，注目されている。

マイケル・ウォルツァーは，1935年３月10日生まれの政治哲学で，1977年に上梓した『正しい戦争と不正な戦争』以来，戦争の正義と不正義に関する力作を続けて発表している[5]。『戦争を論ずる―正戦のモラル・リアリティ』では，湾岸戦争，コソボ戦争，パレスチナ戦争，テロ，イラク戦争など具体的な事例を挙げながら，平和維持，軍隊による占領，政治的再構築の正戦論と実践の双方から，戦争が正か，不正か，という問題が，いっそう深く理論的に考察されている[6]。

我われは，北アフリカや中近東の戦争のニュースに日々接している。そうした中，2011年６月の『毎日新聞』の記事によれば，アメリカのデニス・クシニッチ議員（民主党）は，「リビア空爆は憲法違反」，「リビアの最高指導者カダフィ大佐の命まで狙う軍事作戦が続いている」，「戦争の正当性について説明する義務がある」などとして，オバマ大統領を訴えたという。[7]クシニッチ議員は，戦争の正当性を要求し，同時に空爆の停止と停戦交渉の開始を訴えたのである。他方，当事者のオバマ大統領は，2011年３月26日，週末恒例の国民向けビデオ演説で，リビアへの軍事介入について「人道上の大惨事が回避され，数え切れない一般市民の命が救われた」と語り，米国民に理解を求めた。古来，戦争の正当化のために，しばしば「平和」が持ち出されてきた。アメリカ主導の戦争では，「平和」が「人道」と入れ替わっているだけである。

ウォルツァーも「戦争の正当性」を問題にしている。本書の最初の部分では，次のようなことばが見られる。すなわち，「戦争が正しいものになり得るのだろうか？」，「恋と戦争は手段を選ばない」，「戦争とは，手段を異にした政治の延長」。また，「政治は手段を異にした戦争の延長」なので，「戦争行為は常に道徳的批判にさらされなければならない」。第二次世界大戦中に育った著者は，侵略行為や残虐行為（ナチスの戦争犯罪やルワンダの殺戮行為）に軍事的に介入することは，人道的だと主張する。

以下，本書の概要を紹介したい。本書は，第１部「理論」，第２部「ケース」，第３部「未来」という構成になっており，理論を基礎とした事例研究といえる。

１「正戦論の勝利」において，著者は，平和主義者を装った破壊，侵略，戦争が多いこと，あらゆる侵略者が平和か人道を口実にすることを指摘する。また，従来の戦争の標準的な評価の枠組が，平和を守るために正義ではなく利益「国益」であったと批判する。こうした前提に立って，新しく戦争を論ずる必要性があるとし，また，真に道徳的な観点の「人道上」から戦争を検討すべきだと断言する。人権・人道の観点から見た場合，ベトナム戦争，ボーア戦争など，戦闘中に残虐行為（非戦闘員，民間人の殺戮）があった戦争は正しい戦争ではないことになる。「正義に疑いのある戦争はしてはならない」と著者は力説する。戦争とは，軍人による戦争をいい，戦闘とは戦闘員間で行われるべきものだからである。無防備の民間人の殺戮は殺人であり，民間人を殺戮するいかなる戦争も不正義である。だが著者は，アフガニスタンを例にとって，場合によっては戦争が必要なときがあると確信している（27頁）。ウォルツァーは，正しい戦争は，戦闘中のみならず終結時にも，原状回復というかたちで貫徹されなければならないと主張する。人道的介入の戦争であれば一層，戦争終結の仕方が問われるので，この議論を根本的に見直すべきだという。ひとたび人道的介入の戦争を成功させた者は，次からも成功させなければならない。著者は，それを成功の代償という。

２「二種類の軍事責任」では，主に将校の責任が述べられている。将校，とりわけ野戦指揮官の

[5] *Just and Unjust Wars : A Moral Argument with Historical Illustrations*,（Basic Books, 1977, 2nd ed., 1992, 3rd ed., 2000, 4th ed., 2006）. 萩原能久監訳『正しい戦争と不正な戦争』（原著，第４版, 風行社, 2008年）

[6] マイケル・ウォーザー著（*Arguing about War*, 1977），萩原能久訳（風行社，2008年）

[7] 『毎日新聞』（2011，６，22）ワシントンから白戸圭一氏レポート「大義なき戦争拡散する」

将校は，二種類の軍事的責任を持つという。一つは軍隊組織の命令系統に由来し，命令と服従の厳しさと責任である。もう一つは民間人に対して模範的兵士・戦闘員として，略奪や強姦に手を染めないように指導する責任である。しかし，これについて評者は，軍隊が，戦争などで命をささげ，死を覚悟している集団であることを考えなければならないと思う。軍隊は教育機関ではない。かつて韓国の陸軍大尉として勤務した評者としては，軍隊に倫理を要求するのは無理だと思う。なぜならば，軍隊の属性からして，「正しい戦争」があり得るという論法自体を受け入れ難いからである。

3「緊急事態の倫理」において，ウォルツァーは，議論の根底にあるテロリズムに真剣な憂慮を表している。テロの暴力は，無辜な（innocent）一般市民を殺害し，人びとを恐怖で萎縮させる，と著者はいう。「無辜な人間は，決して意図的に攻撃されてはならない」なぜならば，「無辜であることは不可侵である」という戦争論理を犯すことになるからだ。しかし，他方では，命が常に危険にさらされている兵士が無辜な人を殺すことがあるのも事実である。

4「テロリズム―免罪に対する批判」において，ウォルツァーは，テロリストは「弱者の民族解放」を自称はするが，被抑圧者のテロリズムが免罪されることはないという。しかし著者は，テロリズムは勝利と支配によっては解決できないので，和解を慎重に希求する政治によるしかなかろうという。そして，人間性を全否定する苛酷な暴力に対しては戦争を抑止すべきだという。

5「救命のポリティクス」において，著者は，ある国家の残虐な内政，内戦，政治的専制，民族的・宗教的迫害に対しては「人道的介入」ができるという。その例として，東パキスタンへのインドの介入，ウガンダへのタンザニアの介入，カンボジアへのベトナムの介入をあげる。介入後は撤退するのが普通だが，介入が長期におよび，信託統治，保護領化した場合もある。したがって著者は，介入を不可避としながらも，原則的には非介入を主張するのである。

以上が理論的な叙述であり，以下は事例研究である。

まず，「湾岸戦争の正義と不正義」において，著者は，戦争が本当に最終手段であったのか，戦争の目的とコストの関係はどうなのか，という問題を検討している。著者が挙げる論法は次のようなものである。すなわち，「場合によっては，火事であれば座視しているわけにはいかない。確かに戦争によって得られる便益よりコストは大きい。しかし、生命の価値は経済的コストとは比較にならない。」介入戦争でも，相手国を承認した上での戦争は正しいが，相手国の存在自体を攻撃する戦争は不正な戦争であるという。しかし，イラク戦争のように政権打倒のための戦争は，基本的に正しくないと批判する。著者の主張は，人権を守るべき，「正しい戦争」は必要だというものだ。

評者は，本書の功績のひとつは，戦争に関する論争のタブーを解消してくれたことだと思う。これまで「正しいか」「正しくないか」と論じられることのなかった戦争を，本書は，善し悪し両面から、あるいは多面的に検討するきっかけを与えてくれた。朴政淳氏も，ウォルツァーの戦争論について，戦争の道徳的論証の基礎を作り、戦争論が盛行するために大きく貢献したとしながら戦争を美化してしまう危険性のあることを指摘している。[8]

国家や共同体は，それらを戦争から守るために軍隊を備えている。軍隊が必要とされるのは，戦争があり得るという前提に立つからである。軍隊はたんなる抑止力ではない。暴力に対しては正当防衛のための防衛戦が必要であるように，軍隊は生命保険のような性質も併せ持つ。ただし，戦争を最終的な暴力の「必要悪」として認めざるを得ない時にはどうするかという問題は，平時にこそ

[8] 朴政淳「マイケル・ウォルツァー（Michael Walzer）の正義戦争論に関する批判的考察」『グローバルCOE「死生学の展開と組織化」、シンポジウム報告論集・「戦争と戦没者をめぐる死生学」』，東京大学大学院人文社会学系研究科、2010：85-87；박정순「마이클 월쩌의 정의전쟁론 그 이론적 구성체계와 한계에 대한 비판적 고찰 」철학연구회편『 정의로운 전쟁은 가능한가 』, 철학과 현실사, 2006' 113-192

議論しておくべきであろう。

しかし，はたして「戦争は正しいのか」という疑問は，読後も残った。殺戮や残虐行為ではなく，命と人権を守ることが最大の正義であり，また兵士間だけの戦いであるといっても，実際に多くの人が犠牲になる現実をどう考えるべきであろうか。[9]兵士は平和の天使になれるだろうか。戦争は殺戮の現場であることを考えるとき，私には「正しい戦争」があるとは思えない。

戦争自体は必要悪でも悪ある。しかし，戦争を「正しい」と容認すれば，普遍的な倫理は破壊されてしまう。戦争の正義をいうのであれば，接頭や暴力にも正義があり得ることになる。忠誠のための復讐殺人は許された時代もあった。また，昔は貧乏な人が金持ちの家の物を盗むことは容認された。韓国では，中国に行った人が綿の種を盗んできたことが英雄として記述されている[10]。ギリシャ神話にも，火を盗んできたという話がある。[11]火事が起こった結果，都市が新しく再建されることもあろう。しかし，今はそういった歴史の倫理に戻るべきではない。

本書は戦争論に満ちているが，論理的に大きく矛盾していると思われる箇所がある。それはテロに関する叙述である。テロは人間性を根こそぎ奪う苛酷な暴力である。しかし，ウォルツァーは，テロは戦争では解決ができないという。慎重に和解を求める政治によるしかなく，テロに対しては戦争より政治に重点を置くべきであろうという。著者は，戦争は最終手段ではないのか、テロは戦争とは本質が違うものなのか、という本質を，より詳しく議論すべきであった。

評者は，戦争が一種の政治の手段であれるのであれば，戦争はすべきではないと思う。愛国のために命を捧げたことが政治状況の変化によって「犬死」とされることは望ましくない。私が経験した朝鮮戦争においては，兵士はだれかれ問わず民間人を虐殺し、性的暴力を振っていた。兵士は生命が絶えず危険にさらされており、戦争とは無関係の人々さえ殺すことがあり得る。兵士は共同体の人たちの生命を守るために自己の生命にリスクを負う。民間人も戦争の支援者となることがあり、無辜な民間人が犠牲になることもある。交戦区域では，身の脅威を感じる兵士は先制攻撃を余儀なくされる場合もあるだろう。戦争でルールを守るという前提は無理であろう。

戦争は，人権と人道を侵した国家に対する刑罰・死刑制度のようなものだという考えが，戦争の理論的な根拠とされることがある。しかし，死刑廃止論が一般的になっている時代に，多くの命を賭ける戦争を容認するわけにはいかないであろう。

ここで，正しい戦争とは何かという根本的な疑問に至る。人類の悲劇を防ぐのは当然であるが，戦争は最終的な暴力として認めざるを得ないという「必要悪」として戦争を行うべきであろうか。侵略，軍事介入，自衛，非戦闘員保護，捕虜，テロリズム，戦争犯罪に対して，「人権」を守るために戦争は正当化されるのであろうか。先のオバマ大統領の宣戦演説で，平和のための戦争の正当性が主張されていることに，評者は不信感を抱かざるを得ない。オバマ大統領の宣戦演説は，明治政府が日清戦争時に出した詔勅を思い出させる。明治政府は800字強の宣戦文『清国ニ対スル宣戦ノ詔勅』を出したのであるが，そこにはじつに「平和」という言葉が６回も入っていたのである。[12]

次に戦争の正と不正の判断基準のモラルについて考えてみたい。この点については，殺戮や残虐行為から命と人権を守ることが最大の基準となろう。しかし，戦争における正と不正の判断基準は，命を捧げて死を覚悟する集団の間での戦いではあ

---

[9] Alvin and Heidi Toffler, *WAR AND ANTI-WAR : Survival at the Dawn of the 21st Century*, Little, Brown and Company, 1993:14負傷者などを除いて死者が3,300万から4,000万人ほどである。

[10] 文益漸（1329～1398）は高麗の恭愍王の時代に元朝中国から木綿の種子を盗んで（隠して）来て、朝鮮に木綿を普及させた。

[11] 人類最初の女性のパンドラ（Pandora）はプロメテウス（Prometheus）が火を盗んだことの罰として，絶対に開いてはならない小箱と共にゼウスによって人間に授けられたが，箱の中身を見たいという誘惑に負けて箱を開け，人類に災いをもたらした。

[12] 『清国ニ対スル宣戦ノ詔勅』（1894年８月１日）「朕カ即位以来茲ニ20有余年文明ノ化ヲ平和ノ治ニ…」，「朕ハ朝鮮ヲシテ禍乱ヲ永遠ニ免レ東洋全局ノ平和ヲ維持…」，「帝国ノ権利利益ヲ損傷シ以テ東洋ノ平和ヲ…」，「実ニ始メヨリ平和ヲ犠牲トシテ…」，「朕平和ト相終始シテ以テ帝国ノ光栄ヲ…」。「速ニ平和ヲ永遠ニ克復シ以テ帝国ノ光栄ヲ…」

まり意味がないように思う。そもそも，戦争によって多くの人が犠牲になった事実を議論の前提とすべきである。[13]人間を殺さずに武器や施設だけを壊すというトフラーの未来の戦争は現実には不可能であろうし，戦争が平和や人権の擁護を目的として行われるにしても，命を賭し戦う兵士が，倫理を守る平和の天使のようになれるのかは大いに疑問である。戦争という組織においては，上位が平和で下位が戦争である。「戦争と平和」は小説の題目だけではなく，実に戦争のメカニズムでもあるのである。

著者は，戦争のルールを設定して守ることを主張している。要するに戦争をスポーツのゲームとして考えている。確かに侵略戦争や占領，植民地支配などと比べると，人権的な戦争介入はそれほど悪くないかもしれないが，戦争自体を「正しい」と容認すれば，普遍的な倫理は破壊されると思う。国際社会で審判（国際警察・国際裁判）の下でルールを守って戦争ゲーム（？）をするというのは幻想であろう。

一般的に「正しい戦争」があり得という論法自体は，そのままでは受け入れ難いだろう。戦争は最終的な暴力である。著者は，調停役としての国際警察制について言及する一方で，国際社会で戦争を論じ，政策を立案し，裁判を行うべきだと主張している。政治の戦争，戦争の政治を語る著者によれば，政治とは戦争にいたる道を防ぐことなのである。

日本は北朝鮮などを激しく敵対視していているが，政治，外交活動をしていない。私からすれば，それは戦争にいたる道であるように感ずる。日本は，戦争と反戦のメカニズムを平和的にこなせるようにするべきであると思う。

（風行社，2008年，316頁，2,940円）

[13]Alvin and Heidi Toffler, *WAR AND ANTI-WAR : Survival at the Dawn of the 21st Century*, Little, Brown and Company, 1993：14負傷者などを除いて死者が3,300万から4,000万人ほどである。